

ぼんぼん物語

—“テレビの原点” 秘蔵フィルム復刻レストア特別配信セレクション—



黄色=配信 灰色=欠番	タイトル	放送日	尺	原盤フィルムの状態 ◎良好(DVD化) ○可 △音よれ修復 ×音声取れず ●欠番(フィルム無し)	内容
	ぼん子ぼん吉誕生の巻	1957/11/11	7分51秒	◎	子ダヌキ兄妹ぼん吉(栗原真一)ぼん子(小鳩くるみ)は良い子のご褒美に人間に生まれ変わった。鶴のおばさん(若水やエ子)は二人を別々の場所に運び生き別れにする。
	あわて大砲の巻	1957/11/12	7分35秒	△	子だぬきの兄妹は人間の赤ちゃんに生まれかわる。こうのとりにてなく、鶴が赤ん坊を人間の世界へ運んでいく。みちのくの白妙城では家来の精助、八回がそわそわしている。殿にお世継ぎが今にも誕生する。男の子なら祝砲が一発、女の子なら二発をうちあげる係をつとめる。折しも、二人の頭上を一羽の鶴が二つの包みを加えて飛んできた。そのとき、城の中から赤ん坊の音が聞こえてきた元気な声に精助、八回は男の子と思い込み、一発の祝砲を打ち上げた。ところが生まれたのはお姫さまであった。殿から叱責を受ける二人。家中、街には若君誕生と大砲で知らせてしまったからには7歳になるまでは姫を若君として育てようということになった。精助と八回は養育係を命じられた。
	子守唄の巻	1957/11/13	7分31秒	△	江戸の長屋。貧しい浪人の弓矢折太郎は赤ちゃん誕生によるこびを爆発させていた。名前はぼん吉。ところが、赤ん坊を産んだばかりの妻はからだに弱くお産の直後に死んでしまった。妻を失った弓矢は自分の貧しさを悲観し、赤ん坊のぼん吉を裕福な呉服商大黒屋の家の前にすててしまふ。産着に風車と自分の短刀をはさみ「世の中のために人になってくれ」と泣きながら立ち去る。
	兄星妹星の巻	1957/11/14	7分26秒	△	大黒屋の家の前。朝である。番頭さんが掃除を始めると捨てられた赤ん坊をみつつける。そこへ呉服屋の主人があらわれる。赤ん坊の産着に手紙がさしはさんである。「不幸な星のもとにうまれた子どもにお情けを」などと書いてある。主人は「無駄飯は食わせられない」と言い、番頭に赤ん坊を別のところに捨ててくるよう命ずる。赤ん坊を抱えて番頭が困っていると人のいい魚屋の魚徳がやってきた。番頭はすきを見て、魚徳の魚桶に赤ん坊を隠す。魚徳は赤ん坊に気づき、家に連れていく。魚徳の女房のお政は子どもを自分の子として育てると言い切る。
	ぼん子ぼん吉評判の巻	1957/11/15	7分23秒	△	「七年が夢のようにすぎました。」とテロップが入る。白妙城では初夢姫が精助、八回を相手に剣道のけいこをしている。精助、八回は敵わない。初夢姫は腕をあげた。稽古を終えて、夕暮れの空を眺めると一番星がまたたく。初夢姫は空に向かってつぶやく。「一番星はぼん吉お兄ちゃん。二番星はこのあたし。ぼん吉お兄ちゃんはどこで暮らしているのかしら。」白妙城のお庭で大殿と奥方が姫のことを話している。町で姫が人気があるのは姫が困っている人を見つめると姫が励ましているからだという。家老の六馬新左工門が庭にやってきて「姫がまたお忍びで町に出た」と進言する。そのころ、姫は町でひとびとに施しをしていた。一方、江戸では魚屋の魚徳の家で、ぼん吉は育ての母であるお政の肩をもんであげている。そこへ魚徳が帰ってきて、ぼん吉が町で評判がいいとお政に話す。ところが、ひとつ気になることがあるという。ぼん吉が人気があつて商売をもっていけたと逆恨みしているやつらがいるという。
	これは不思議の巻	1957/11/16	7分27秒	◎	ぼん吉は魚の桶をかついで、行商にでかけた。すると商売敵の大人たちが待ち構えていた。
	これは不思議の巻	1957/11/18	7分30秒	△	ぼん吉は人の善い魚屋夫婦(魚徳=大塚周夫、お政=宇野良子)に引き取られた。ぼん吉は親孝行と評判となり店は繁盛する。それをねたむ悪い奴らがぼん吉と夫婦に襲いかかる。
	これは不思議の巻	1957/11/19	7分26秒	△	姫は兄ぼん吉を思えばかり。生き別れになって10年。ぼん吉は江戸で妹を思っていた。姫になったと知らない。実の父も知らない。折しも、その父、弓矢折太郎が通りがかる。
	これは不思議の巻	1957/11/20	7分3秒	△	弓矢折太郎の下へ、弟の弱井剣之介がすつ飛んでくる。何でも道場破りがやってきたという。それも女剣士だという。すると女がやってきて挑みかかってくる。何者なのか
	情けは人のためならずの巻	1957/11/21		×	初夢姫は「江戸へゆきます」との書置きを残し旅立った。八回と精助は大殿から叱責され、姫を捜しにゆく。姫は街道をゆくが江戸はあまりに遠い。タヌキの秘術を使おうとする
	これから面白くなるの巻	1957/11/22	7分11秒	△	森の中、八回と精助、暑くてこしかける。蝶がとぶ。初夢姫が変身したものの。姫の声を聞いた二人。二人はこわくなって帰っていく。姫は鳥になろうとするが今度は何も利かない
	からから風車の巻	1957/11/23		×	神さまの「鶴のおばさん」があらわれる。「術は人のために使わなくてはだめだ」と諭す。情けは人のためならずと教える。一方、ぼん吉は父、弓矢折太郎から剣の稽古をつけられている。白妙城にもどり、報告する精助、八回。大殿はいかる切腹をいいわたされる。切腹をしようとする二人の前に初夢姫があらわれる
	あわて飯つぶの巻	1957/11/26	7分19秒	△	姫は城に戻った。江戸に行けずすっかり元気がない。精助と八回はおどけ、笑わせ姫に元気を出させようとする。殿たちはなぜ姫が江戸に行きたいのか理由がわからない。
					浪人、弓矢折太郎は江戸の大店、大黒屋の前までやってきた。忘れもしない10年前、弓矢は妻を亡くしたショックと貧しさのあまり生まれたばかりのぼん吉をこの呉服店の店先に置いていってしまったのだ。赤ん坊の肌着には、自分の愛用していた拵の美しい短刀を守り刀として差し込んだ。何もできないがせめて赤ん坊に笑顔になってほしいと風車をひとつ添えた。呉服屋が赤ん坊を捨ててくれたのではなかったのか。弓矢は首をひねる。先日、偶然会った魚屋の子どもの名がぼん吉という名前だった。それも身の上を聞けば本当は武士の子どもなのに捨てられたのだという。年のころもちょうど10歳。魚屋のぼん吉が我が息子なのか。弓矢はそれを確かめに来た。弓矢は店の番頭にそれとなく聞く。あの日の朝、呉服屋の主人は捨ててある赤ん坊に気が付いて、やっかいもの扱いをした。番頭に他の場所に捨ててこいと命じた。番頭はどこに持っていか、場所を探しあぐねていたときにたまたま魚屋が通りがかった。天秤棒に桶をかついでいる。魚屋が目を見て話しているすきに番頭は赤ん坊を桶に入れて逃げてきた。弓矢はやはりそうであったかと合点がいった。
	ああ、親心の巻	1957/11/27		×	その頃、魚徳ではぼん吉がしげしげと短刀を見つめていた。自分が捨てられたときに一緒に添えてあったものと聞いている。実の父のぬくもりの短刀だ。その頃、魚徳は街でプラカードを掲げて大声を張り上げていた。ぼん吉から、離れ離れになった妹の話聞いた。「ぼん子ちゃんのゆくえを誰か知らないか」と町ゆくひとに聞いていた。
	これは奇々怪の巻	1957/11/28	7分28秒	◎	ぼん子はどこに。魚徳がプラカードを立てているのが長屋の話。その頃、お城のぼん子姫は食事もとる気がしない。かわりに食べてといわれ精助たちは米びつを抱え…
	美わしき姫の巻	1957/11/29	7分32秒	◎	(切々たる人情話の回である。それも脚本家川内康範の実人生の痛切な思いが投影されていると考えられる話だ。) ぼん吉も元気がない。離れ離れの妹を思っている。
	ぼん吉お手柄の巻	1957/11/30	7分20秒	◎	魚徳夫婦は心配する。ぼん吉は唐突に「たぬき」のことが好きかどうか夫婦に聞く。二人はキツネより好きだなどと答える。そんなとき障子から包みが投げ込まれた。
	これは強い巻	1957/12/2	7分25秒	◎	包みには折文と小判が入っている。折文には「神」とだけ記してある。それを投げ込んだのは父親の弓矢折太郎だった。捨てた息子が魚屋夫婦に育てられていると知りそうとのぞきに来たのだった。
	姫はぼん子の巻	1957/12/3	7分28秒	◎	弓矢は道場にもどると弟子の弱井にこんなことを語る。「ぼん吉はしあわせだ。貧しいながらも魚徳夫婦と共に愛し、いたわり合って生きる。あれこそがまことの幸せというものだ。わしは十年前貧しさのゆえにその心を失っていた。いまさら、父親だと名乗って何になろう」
					遠くから息子の幸せを見守り続けるという弓矢のこぼれに弱井はもらい泣きする。
					兄に会いたい。初夢姫はついに病に伏した。何ゆえの病か。医者もわからない。行者が呼ばれる。「生まれる前からの兄が江戸にいる。江戸にいけば病は治る」と告げる。
					姫は身分を隠し、町娘の姿でお伴を連れて道中することになった。しかし、お伴が心もとない。家老は心配のあまり池に落ち風邪をこじらせる。美わしい姫は枕元で看病する。
					幕臣松木右京之助の娘、深雪が浪人者に取り囲まれた。通りがかったぼん吉が助けに入り、天秤棒で撃退する。深雪は少年の強さに驚き、素性を調べさせる。
					お手柄の少年は魚徳のぼん吉だった。娘から話を聞き、幕臣松木右京之助は感心する。ぼん吉の腕前と人間をみたいと一計を案ずる。なぞの侍を装いぼん吉に剣を挑む。
					初夢姫は町娘の「ぼん子」として旅立つ。その姿をみた家老六馬新左工門はお姫様が情けないと切腹しようとする。大殿、奥方は本当に辛いのは私たちだとたしなめる。

第20話	ぼん子出発の巻	1957/12/4	7分10秒	◎	いよいよ出発の日。姫と精助、八回の三人を大殿たちが天守閣から手を振って見送る。姫は近道の山路をえらぶ。精助たちは山賊でもでないかと心配になる。案の定・
第21話	八回苦しむの巻	1957/12/5	7分14秒	△	姫たちは忍者たちに囲まれてしまった。絶体絶命だ。精助が立ち回っている間に姫と八回は一端は逃げた。しかし、八回は忍者たちに捕まってしまい拷問を受ける
第22話	清助よ何処の巻	1957/12/6	6分22秒	△	絶体絶命の八回。木の陰から見ていた姫がヤムチャカポンポコと呪文を唱えようと八回は忍者の前から消えた。一方、精助は山賊に連れ去られていくところだった。
第23話	喰うか喰われるかの巻	1957/12/7	6分49秒	△	八回と姫も山賊に捕まってしまった。山賊たちは洞窟で酒盛りである。八回は今にも食べられてしまいそうになる。姫は山賊に脅されてもここにこと鷹揚にしている
第24話	鬼にもナミダの巻	1957/12/9	5分55秒	△	姫は一味をタヌキの術で次々に石にしてしまう。山賊の親分も丸坊主にされてしまい降参する。姫が山賊に「本当は悪い人ではないわ」と言うと山賊は涙を流し泣き伏す
第25話	父迷うの巻	1957/12/10	7分20秒	△	山賊の支配地を後にして姫一行は旅を続ける。江戸まであと70里。江戸では弓矢がぼん吉に出逢う。ぼん吉は我が息子。弓矢はその秘密をぼん吉には明かせない
第26話	涙は見せぬの巻	1957/12/11	6分26秒	△	幕臣松木家の養子にとぼん吉は請われた。ぼん吉はいやだと魚徳に言う。魚徳は涙をこらえてぼん吉を説得する。もともとは侍の子なのだから。養子になれという。
第27話	サムライぼん吉の巻	1957/12/12	7分09秒	△	ぼん吉は松木家の養子になることをしぶしぶ承諾した。魚徳は立派な侍になってくれと言う。ぼん吉は胸がいっぱいになる。空を見上げて、ふとぼん吉のことを思う。
第28話	悲しき運命の巻	1957/12/13	5分47秒	△	魚屋のぼん吉が幕臣の養子に！長屋では大騒ぎ。ぼん吉は立派な若侍姿に。一方、弓矢は「革命家」の道田角兵衛に迫られ倒幕に与することに。すれ違う親子の運命は。
第29話	おそかりし対面の巻	1957/12/14	6分00秒	△	「ぼん吉、ゆくではないぞ！」弓矢は叫んだ。よりによって息子ぼん吉が幕臣の養子となるとは。弓矢は倒幕に与することを決めたばかりだ。親子の立場は切り裂かれた
第30話	謎の女の巻	1957/12/16	5分46秒	△	道場には謎の女が待ち構えていた。女は一通の手紙を持参した。差出人は「坂本龍馬」となっている。女は父を安政の大獄で失った。今は攘夷倒幕に身を捧げているという
第31話	みんな善い人の巻	1957/12/17	7分01秒	△	坂本龍馬から弓矢折太郎への手紙は維新への協力を求めるものだった。しかし、そんな手紙を龍馬が出すのか。ぼん吉は幕臣松木家の養子、源之助となることになった
第32話	六馬書き置きの巻	1957/12/18	7分05秒	△	白妙城では家老の六馬新左衛門が姫の道中を心配している。姫はゆうゆうと会津路を江戸へ向かっている。家老は心配が限界に達する。意を決し書き置きをしたためはじめた。
第33話	あれやこれやの巻	1957/12/19	7分05秒	△	六馬は書き置きをしたためた。早馬を飛ばして姫を追う決心だ。姫の一行は一路江戸へ。八回は疲れて歩けなくなる。姫は駕籠を降り、代わりに八回を乗せてあげる。
第34話	空飛ぶ歌の巻	1957/12/20	6分32秒	△	姫たちは二本松を過ぎた。途中、八回がまたもやはぐれてしまった。「迷子の八回よ」と姫は歌う。幕臣の養子となったぼん吉はまだ松木源之助としての自分がしっくりこない
第35話	人それぞれの巻	1957/12/21	6分55秒	△	幕臣松木家の門前に怪しい人影。なにが手紙差し入れた。左封の手紙は普通ではない。ぼん吉＝松木源之助は剣の腕を磨いている。腕前を發揮する日も近いかも知れない
第36話	姫を恋う歌の巻	1957/12/23	7分00秒	△	松木右京之介の養子となった源之助(ぼん吉)は特命を課された。幕藩体制を守るため白妙城に密書を運べというのだ。一方、城では姫の無事を大殿、奥方が祈っている
第37話	風の巻	1957/12/24	7分30秒	△	道田角兵衛は弓矢折太郎に密談をする。幕府が密使を白妙城に遣わし、東北諸藩を佐幕に固めようとしている。それを阻止せよという。密使はぼん吉なのだ。弓矢はまだ知らない
第38話	雨の巻	1957/12/25	6分54秒	△	道田角兵衛は密書を奪いに動き出した。一方、女志士おしんは道田は私欲のために密書を奪おうとしていると弓矢に警告する。道田は松木家に押し入り、右京之介を斬った
第39話	嵐と子守唄の巻	1957/12/26	6分48秒	◎	右京之介は「源之助」として息絶えた。道田角兵衛は密使が源之助(ぼん吉)であると知る。源之助は育ての親である魚徳の家の前でそつと別れを告げる。そこへ道田が現れた
第40話	みんな狙われてるの巻	1957/12/27	6分56秒	△	道田一味に取り囲まれたぼん吉あらため源之助。絶体絶命というときに白虎のおしんが拳銃をもってあらわれた。一味がひるんでいるすきに源之助は逃げた。弓矢とおしんの作戦であった。弓矢は道田に追撃の指揮をとると宣言する。一方、父、松木右京之介を殺された娘みゆきは父の仇を討つために道田一味を追って旅にでる。かくして、ぼん吉あらため源之助を道田一味であり、一味のふりをしている弓矢が追い、それをまた右京之介が敵討ちのために追うということになった。
第41話	旅から旅への巻	1957/12/28		●	(欠番です。フィルムが現存していないため内容は不明)、
第42話	これは驚きの巻	1957/12/30	5分35秒	△	道田一味の味方のふりをした弓矢は源之助を追う。源之助は大宮あたりを回っているだろうと弓矢は手下にいう。魚徳夫婦はぼん吉が騒動に巻き込まれてしまったことを知り、案ずる。弓矢は一味のふりをしながら、心中、息子のぼん吉あらため源之助を守ることを誓う。源之助とお伴の豆吉は大宮の宿あたりを使命感に満ち、晴れ晴れと歩いている。
第43話	危いお年玉の巻	1957/12/31	6分53秒	△	迷子になっていた八回は偶然、姫を追ってきた六馬新左衛門と再会する。
正月特番	初夢の巻	1958/1/2		●	(欠番です。フィルムが現存していないため内容は不明)、
第44話	これまでのあらすじの巻	1958/1/6		●	(欠番です。フィルムが現存していないため内容は不明)、
第45話	あばれ街道の巻	1958/1/7	7分08秒	△	源之助たちに道田一味が追いついた。密書を出せと迫る。源之助もやむなく剣を抜いた。
第46話	空飛ぶ雲の巻	1958/1/8	7分11秒	△	ぼん吉あらため初夢姫は道中、どうしてもお城が恋しくなった。ためきの術で雲にのって下界を遠眼鏡で見る。すると兄のぼん吉あらため源之助が一味に拳銃を突き付けられて絶体絶命のピンチである。
第47話	大人は泣き虫の巻	1958/1/9	6分51秒	△	源之助は絶体絶命。拳銃を向けられ、密書を渡すか、命を渡すかと迫られる。そこへ馬に乗って鬼面菩薩が現れる。鬼面菩薩はひとり一味と対決する。源之助はそのすきに逃げる。鬼面菩薩は源之助を逃がすとそれ以上、一味と戦うことなく馬で去っていく。一方、初夢姫と精助は久しぶりに八回と再会する。八回と精助はうれし泣きする。泣き止まない。
第48話	泣けますよの巻	1958/1/10	6分45秒	△	弟源之助を追って、松木みゆきが旅を急ぐ。やくざものに絡まれているところへ弓矢折太郎が現れピンチを救う。みゆきは弓矢が父の仇と思い込んでいる。弓矢は革命党の道田角兵衛が手下人だと明かす。
第49話	歌う街道の巻	1958/1/11	5分17秒	△	久喜の宿場。みゆきが北に向かう。小山の宿。姫とふたりが南へとくだる。家老六馬も三人を追う。大宮の宿場。魚徳夫婦がぼん吉を探している。一方、源之助に三度追っ手が迫る。ぼん吉あらため源之助はついにタヌキの秘術を使うことにする。そこへ弓矢があらわれる。源之助は戦わず去る。
第50話	ぼん吉大いに化けるの巻	1958/1/27	5分58秒	◎	道田の一味に源之助は捕らわれた。仇討の娘みゆき、弱井も立ち向かう。そこへ鬼面菩薩があらわれ、加勢する。源之助も秘術で雲の上へ飛び上がり、天から技を見舞う
第51話	師弟は父子の巻	1958/1/28	5分35秒	△	道田との戦いの最中、源之助に密書を託された従者の豆吉は、ひとつ先、栗橋の宿場で源之助を待つ。源之助、松木みゆき、弱井剣之助、の三人は宿場に向かう。さきほどの窮地を救った鬼面菩薩は誰なのかとひとしきりの話となる。弱井は鬼面菩薩の構えは護身流であるという。護身流ならば弓矢折太郎先生だ。そして、その弓矢こそ源之助のほんとうの父ではないか。うっかり弱井はその秘密を洩らしそうになる。一方、突然、栗橋の宿場に鬼面菩薩が現れた。豆吉に密書を手渡せと迫る。勤王、王政復古を実現するには密書を佐幕方に渡してはならないという。豆吉は密書を手渡す。その後を道田が追ってきた。
第52話	二人鬼面の巻	1958/1/29		×	鬼面菩薩は密書を手にするると早馬を駆け江戸へ向かう。途中、栗橋の宿にむかった源之助一行とすれ違う。豆吉は密書を手渡したことを源之助に告げる。そこへ道田角兵衛の一味が追いかけてくる。道田の前に虚無僧が尺八を吹きながら現れる。深編笠ながら現れる。深編笠ながら現れる。弓矢は道田の魂胆を喝破したことをはつきりという。弓矢と道田一味は決闘とならんとする。そこへ馬を駆って鬼面菩薩が現れた。弓矢を馬に乗せ去っていく。
第53話	はじめて人を切るの巻	1958/1/30	6分56秒	△	弓矢を救った鬼面菩薩は、女志士おしんであった。(第30話「謎の女」に登場)安政の大獄で、父を幕府に殺された恨みから坂本龍馬に与して勤王倒幕運動に身を投じている。弓矢は手に入れた密書をおしんに託した。一方、道田一派は密書をあきらめたが、計画を変更し、源之助、初夢姫をさらい、人質として100万両を手に入れようとする。その謀議を陰で聞いていたのが鬼面菩薩だった。道田一味と鬼面菩薩の決闘となった。鬼面菩薩は剣豪であり、峰打ちで次々に敵を倒す。しかし、道田の拳銃で左腕を撃たれてしまう。追い詰められた鬼面菩薩はついに敵方を斬ってしまう。人を斬らぬことを信条としていた護身流の信念を逸脱してしまった。そして、鬼面に刀を受け、割られてしまう。鬼面菩薩は弓矢折太郎であった。手負いの弓矢はふらふらになりながら、一味と必死に戦う。
第54話	めぐりあわせの巻	1958/1/31		×	弓矢はついに追い詰められ、道田に斬られてしまうというピンチとなった。通りがかった魚徳たちが大騒ぎをすると、道田たちはとどめを刺さず去っていく。弓矢は銃創がうずく。一方、初夢姫(ぼん子)一行は日本晴れの奥州街道を晴れ晴れと歩いている。江戸がだんだん近づいてきた。次の宿場は栗橋だ。と編み笠の一味が姫たちを追ってきた。
第55話	鬼気迫るの巻	1958/2/1		×	栗橋の宿場で初夢姫の一行が宿を探す。ある宿屋に入ると老夫婦が出てきた。元気がない。女中もいない。沈鬱な様子に八回、精助がわけを聞く。なんでも長男が勤王の志士となり、出奔。弟は幕府に捕らえられた。長男が勤王の志士ということで、幕府から目の敵にされ、女中たちも出ていったという。初夢姫は大いに同情する。八回、精助が宿の外に出るとそこに編み笠の一味がいた。
第56話	七化けぼん子の巻	1958/2/3		×	初夢姫(ぼん子)はおんぼろ宿屋の老夫婦の話を聞いて、宿屋を目的にする幕府の役人を懲らしめる。初夢姫は一目小僧やまむしに変身して、役人を震え上がらせた。一方、宿屋には編み笠の一味が押し掛けてきた。八回、精助は宿屋の老夫婦に変装している。
第57話	姫罷り通るの巻	1958/2/4		×	道田角兵衛の一味は初夢姫を追って、宿場にやってきた。姫と従者二人が泊まっているという旅籠に踏み込む。すると部屋にはためきの置物があるだけ。精助、八回は変装して難を逃れる。道田一味はためきの置物を怪しいとにらむと初夢姫は火の玉に化けて、一味を追い払う。騒動を聞いて、火付盗賊改方が駆けつける。精助、八回は捕縛されるが姫があらわれて、その素性が明かされると、水戸黄門の印籠の葵の御紋のように幕吏たちは平伏する。
第58話	人は知らないの巻	1958/2/5		×	弓矢は拳銃の傷が重く、宿で医者の手当てを受けた。魚徳夫婦は必死で看病するが弓矢はうなされている。一方、松木源之助の一行はとぼとぼ歩いている。密書を失ってしまった。途中で、割れた鬼面菩薩の面を見て、鬼面菩薩のことが心配になる。
第59話	愛すればこそその巻	1958/2/6		×	源之助一行は栗橋の宿場に到着した。投宿した宿は弓矢が傷を負って臥せっている同じ宿である。そこへそりそりと道田一味がやってきた。外から様子をつかがっている。弓矢の弟子の弱井が一味にきづく。危機が迫っている。源之助の従者の豆吉が外にでると道田の一味にでくわし、斬られてしまう。

第60話	ワナワナワナの巻	1958/2/7		×	源之助は同じ宿に泊まっている弓矢折太郎先生と話すことになった。旅をして、いろいろと学んだと源之助はいう。特に「鬼面菩薩にはどうすれば人の役に立つのかを教えてください」というと弓矢は「鬼面菩薩？」と問い返す。部屋には義理の姉となったみゆき、弓矢の弟子弱井、そしてぼん吉の育ての親の魚徳夫婦が座っている。みゆきはしみじみと「ぼん吉の本当のお父さんを探してしわ寄せに暮らして欲しい」という。本当の父に会いたい。そして、妹のぼん子に再会したい。そう思うぼん吉であった。一方、そのぼん子(初夢姫)は江戸への旅を急いでいた。一方、弓矢は同心たちに囲まれた。道田一派の讒言によって不逞な浪人者とされてしまった。
第61話	はたして逢えるのかの巻	1958/2/8		×	弓矢は幕吏に捕縛され、しょっぴかれていった。その時、江戸へと急いでいた初夢姫一行とでくわす。「無実だ」と訴える弓矢のようすをみて、姫は「離してあげなさい」という。幕吏たちと姫たちとの戦いとなった。一方、弓矢が捕縛された源之助、魚徳、弱井の男たちは弓矢のもとへと駆けてゆく。宿には女たちが残った。その障子に道田の影がふうつと映った。
第62話	ぼん子ぼん吉出会の巻	1958/2/10		×	旅籠では、魚徳の妻、お政と松木みゆきの部屋へ道田一味が押し入ってきた。一方、幕吏たちともみ合いになっていた初夢姫一行だが、姫は弓矢を駕籠に入れて逃げた。幕吏に捕らえられた八回と精助のところへ、弓矢を助けにきた源之助の一行がやってくる。ついにぼん吉とぼん子が同じ場所に居合わせるようになった。いよいよ二人は運命の再会をすることになる。
第63話	敵も強い巻	1958/2/11		●	欠番(フィルム無し)※この回で、ぼん吉ぼん子の兄妹は人間に生まれ変わってからはじめて再会している。この決定的な回のフィルムが残っていないのは残念である。
第64話	すれちがいの巻	1958/2/12		×	「狐和尚」が登場。きつねの妖術使いだ。道田一味は、初夢姫(ぼん子)と源之助(ぼん吉)を捕えて欲しいと依頼する。捕まれば、莫大な身代金をとれる。そんなことを持ちかける。きつね和尚はまかせると引き受けた。弓矢は初夢姫(ぼん子)と源之助(ぼん吉)に道田一派を成敗せねばと話す。傷も癒えていないのに立ち向かっていこうとする。初夢姫と源之助はなかよく森の中を走っていく。※このシーンは、全話の中で、人間に生まれ変わってからはじめての二人が一緒のシーンである。二人の姿がかわいらしく、微笑ましい場面である。一方、家老の六馬新左工門は姫を追いかけて街道をゆく。「すれ違い街道」という標識のある三叉路でどの道をゆくか悩む。一方、弓矢が出立の支度を終えて、いざという時に道田の手下が押しかけてきた。弓矢は取り囲まれた。
第65話	危機かさなる巻	1958/2/13		×	傷を負っている弓矢は力を振り絞って戦うものの、分が悪い。師匠の危機にこれまで頼りなかった弱井剣之助が奮闘する。そして、ついに道田の手下を斬ってしまう。一方、道田はぼん吉ぼん子に近づきおとなしく人質になれと迫る。二人のもとに、みゆきや魚徳たちが縛られて連れてこられる。ぼん吉ぼん子はふたり力をあわせてたぬきの秘術でその場から消える。道田に加勢するきつね和尚がやってきた。
第66話	七化け合戦の巻	1958/2/14	6分44秒	◎	最後の難敵、きつね坊主(小林重四郎)はぼん吉、ぼん子に襲いかかる。きつね坊主は化け比べを挑む。ぼん吉、ぼん子はたぬきの力で、蝦蟇蛙やちびっ児雷也ですが、きつね坊主には敵わない。二人はきつね坊主の「金縛りの術」をかけられてしまった。いよいよ絶体絶命だ。二人は神さまに願う。「鶴のおばさん、助けて」とつぶやく。
第67話	喜びと悲しみの巻 (※配信では72話と結合)	1958/2/15	7分05秒	△	ぼん吉、ぼん子は絶体絶命。弓矢も縛られてしまっている。道田が剣を振りかざし、「弓矢、覚悟」と振り下ろした。ついに弓矢の命運が尽きたか。しかし、逆にもんどりうって倒れたのは道田角兵衛だった。さらにぼん吉、ぼん子に金縛りの術をかけたきつね和尚にも異変。何が起きたのか。ぼん吉ぼん子が空をみあげると一羽の鶴が悠然と飛んでいる。「あつ、鶴のおばさん」とぼん子は叫ぶ。鶴のおばさんは二人にかけられていた金縛りの術を解いた。ぼん子はナムチャカボンボコの術できつね和尚を撃退。和尚を石にしてしまう。そして、とらえられていた全員の縄を解いた。弓矢、弱井、みゆき、八回、精助、六馬、魚徳夫婦の全員が立ち上がり、道田角兵衛一味と最後の決闘となる。全員激戦で奮戦するが、傷を負っていた弓矢は倒れてしまう。苦しい息の中で、弓矢はぼん吉(源之助)を呼び寄せる。そして「そなたの本当の父は弓矢、私である」と秘密を明かす。貧しさのゆえ、捨ててしまったが後悔にさいなまれ、貧しいものいなくなるよい世の中を実現したいと武芸に励んできた。そして、ぼん吉に頼みがあるという。「侍の世は終わる。新しい時代に、貧しい人や弱い人のためになる立派な人間になってくれ」と言う。「ぼん吉、ぼん子、兄妹仲良くくらしなさい」といつてついにことになった。
第68話	兄妹同じ心の巻	1958/2/17		×	弓矢折太郎の墓。一同は涙にくれる。ぼん吉は父を喪った。養子に入った義理の父、松木右京之介も殺された。さあ、ぼん吉はどうすればよいのか。初夢姫はお城に戻るようになる。家老の六馬新左工門は姫を連れ戻さなくてはならない。しかし、初夢姫は再会した兄と暮らしたいと願った。まわりのものたちは二人がたぬきの兄妹であったことを知らない。ふたりはみなの前で、たぬきの秘術で仏像に変身してみせた。家老の六馬は腰を抜かした。
第69話	和尚逆襲の巻	1958/2/18	7分02秒	△	ぼん子、ぼん吉はふうつと消えて、そのかわりに天から手紙が降ってきた。手紙には「私たちふたりは、道田の使者を追いかけて白妙城に向かいます。帰ってくるまで心配しないでください」と書いてあった。ぼん子、ぼん吉は連れ立って道をゆく。そこへ、一度蹴散らしたはずのきつね和尚がやってきた。仕返しだという。ぼん子、ぼん吉はたぬきの秘術で雲の上へ。そこへ、きつね和尚が追いかけてきて、大嵐を吹かせて攻撃してきた。
第70話	姫と五十万両の巻	1958/2/19		×	吹き飛ばされそうになって、ぼん子とぼん吉は必死で雲につかまった。ピンチだ。きつね和尚はこれでもかと風を吹かす。とばされてしまいそうになるが、なんと逆にきつね和尚がとばされた。不思議に思っ、ぼん吉ぼん子が空をみあげると一羽の鶴が飛んでいく。三度、神さまの鶴のおばさんが助けてくれたのだ。きつね和尚は雲から墜落して死んでしまった。二人は「七化けきつねの墓」をつくって弔った。二人は道田の使者を追いかける。一方、道田の使者は既に白妙城に到着していた。道田からの手紙には姫を返して欲しければ50万両をよこせと書いてある。道田の手下は白妙城で酒を飲み、傍若無人のふるまい。身代金を手にするまでは動かないという。
第71話	ぼん子よなぜに去るの巻	1958/2/20		●	欠番(フィルム無し)(推測では)ぼん子(初夢姫)とぼん吉は白妙城に到着。道田の手紙にあるぼん子を人質にしたのはうそだった。道田の手下はぼん吉の剣で苦も無く撃退されてしまう。初夢姫が戻ってきたことで大殿と奥方はたいそうなよろこびだった。
第72話	美わしの兄妹の巻 (※配信では67話と結合)	1958/2/21	6分00秒	△	白妙城のお庭でぼん吉はぼん子と大人たちに「ぼん子ちゃんはお城で暮らすのがしあわせだよ」と話す。ぼん吉は江戸にもどって、まだのぞみがあるという。ぼん子は泣いてしまう。大殿はここで二人一緒に暮らしたらいいのにといいとだめだが聞かない。ぼん吉は侍でいるのはいやだという。さんざん斬り合いで辛い思いをした。実の父も義理の父も戦いで殺された。そうすると、ぼん子も兄と江戸にいつて町人になりたいという。大殿と奥方は困った。どうすればいいの。そんな話をしているときに奥方ははずかしそうに打ち明ける。新たに世継ぎを授かったというのだ。大殿はそれを聞いて、決断した。初夢姫に江戸へゆくことを許すことにした。大殿はふたりにそれを話した。奥方は「辛くなったらいつでも戻っておいで」という。大殿が「では、なかよし兄妹、江戸へゆく準備をしたらよいぞ」というと二人はとてうれしそうに顔を見合わせた。めでたし、めでたし。
第73話	新しき出発の巻	1958/2/22		●	欠番(フィルム無し)※残念ながら、欠番である。前話からの流れと最終話のタイトルからこの話ではぼん子ぼん吉が白妙城を出発して、江戸へ到着するまでを一気に描いているのだらう。江戸には人のいい魚徳夫婦が待っている。ぼん吉の育ての親と兄と妹はひとつ屋根の下で暮らすことになる。時代は動き、明治維新となり、侍の世も終わる。新しい時代を二人は町人として仲良く生きていくことになった。

全73話ですが1話振り返りがあり合計74話です。
欠番が6話で総本数は68話です。

画音とも有りが51本です。
音声が取れず映像のみが17本です。